

神聖かまってちゃんと映画「  
渇き。」 ——— 「渇き。」は現  
代の新世紀エヴァンゲリオンで  
ある。

クソ底辺

神聖かまってちゃんと映画「渴き。」

——「渴き。」は今の世代の新世紀エヴァンゲリオンである。

映画 渴き。は今の世代の新世紀エヴァンゲリオンである。

映画『渴き。』（2013）の監督は中島哲也。テレビCMでは《劇薬エンターテイメント》と軽いかたちで宣伝されていた。高校生は初めの週だけ1000円で観ることができるとキャンペーンもうたれていた。とはいえ、映画はR-15。どういう映画なのだ？

劇場へ観にいった。

これが最高だった。

まず、あらすじはざつとこうだ。どこにでもいるような高校生の加奈子（小松菜奈）の行方が分からないと連絡をうけた父親の藤島（役所広司）。元警察ということもあり娘の足取りを追跡していく。

この映画、とちゅうで退席する者がいた。なぜかわかった。画に容赦がないのだ。たとえば、顔を殴るとメキョっという音とともに顔に血が生々しくしたたる。ナイフで人を突き刺し切る、にんげんの絶叫がある。銃弾をくらっても血が吹き出す。R-15指定なだけに、観ていて目を背けたくなるほど痛々しいのだ。

たとえば、チャンバラ映画だと人を刀で切るが、血がドーンと吹きであることはあまりない。出ればいいというものでもないだろうけど。

でも思う。痛みを感じさせないで何が表現というのだろうか。『渴き。』の客がとちゅうで退席したということは視点をかえるとちゃんと痛みが伝わったということだろう。

しかし、映画をとちゅうできりあげてしまっただけでは作品に込められた意図はわからないままだ。じじつ、『渴き。』も最後までみるべき映画だったからだ。

劇中、加奈子を追跡する藤島と時系列をべつにして、加奈子に惚れている同級生「ボク」が主人公になる“「ボク」パート”がある。このパートがあるからこそこれが中学生や高校がみるべき映画になっている。ロッキングオンをシコシコと読んでいるような孤独なわたしたちはとくに効く。

「ボク」パート冒頭、軽快なBGMとともに人が水中に沈むアニメーションが挿入される。どうじに、学校でじぶんは何なのか何者なのか生きる意味はあるのか心の声が「ボク」によってナレーションされる。

次のシーンに切り替わると「ボク」は同級生たちに殴り蹴られてプールに突き落とされている。引きずりだされてさらに殴り蹴るとばされる。鼻から痛々しく血がたれて顔が赤くなっていた。そこで描かれているのは太陽の日が照っている青いプールの水の前でくりひろげられる残酷ないじめである。つまり、清々しくあるはずの青春期だが、じつは残酷性をひめているということだ

。

思えば、青春期が光輝いてすばらしいなんてだれが定説にしたのだろう。じっさいに学校のクラスで起こっていることといえればいろんなことが渦巻いていたはずだ。ホレたハレただけでじゃなく、いじめいじめられ、嫉妬や妬み、グループやハブり、殺人衝動など。

青春期なんて輝かしいものではない。幻想である。

それをぶちまけたのがテレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（94）だった。友人関係の意味、劣等感、怒り、大人への疑念、逃避願望、さらに14歳の性衝動と殺人衝動、ぶちまけた。

さらに劇場版『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 Air/まごころを、君に』（97）でそれがエグみを増し、劇中でシンジは絶叫しっぱなし。登場人物がつぎつぎと絶命していく。エヴァンゲリオン式号機パイロットであるアスカは敵エヴァンゲリオンシリーズと血みどろの戦いをくりひろげる。そして物語は客の予測を超えて、おそらく文学の臨界点近くまでいった。

当時は賛否両論だったという。しかし、いまわたしが観てみるとこんなに最高の映画はない！と思った。なぜなら、とにかくぶちまけまくってるからだ。「しよせんアニメだからこうでしょ」や「こうしたら嬉しいんだろ？」などというようなアニメだからこういうシナリオでいくべきという形がまったくなかったからだ。思えば、テレビシリーズもそれだった。

『渇き。』も似ている。飲料水のCMのような清涼感のあるパート。「ボク」の気弱さ。それに反するような藤島の追跡パート。青春性と血が滴り飛びビドー。バイオレンスと絶命感。レイプと尊厳。シンナーと乱痴気。銃撃とナイフ。すべてがスクランブル交差点でアクセル全体のまま正面衝突していくような、そんな気がしてくる。

なかでも注目したいのは『渇き。』が高校生に向けて宣伝をうっていたことだ。たとえば、CMでは高校生1000円キャンペーンをしていた。そもそもR指定の映画を高校生にむけてキャンペーンをうつなんてわたしは聞いたことがない。

映画が高校生に向けて作られているというのがアツい。「高校生なんてどうせこんなもんでしょ」と高校生に“合わせる”気をつくっていない。何かに向けて作るということはその何かに合わせるのではなく、その何かに伝えたいことを伝えようとするその心持ちである。10代を「たかがガキが！」とってナメてたら出来ないことである。

テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（94）や『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 Air/まごころを、君に』（97）は10代に合わせて作られていない。10代に向けて作られている。その心意気があるからこそバイオレンスも官能的な描写からも逃げない。描く必要があると思えば描く。

それが『渇き。』にもあった。「ボク」は加奈子に誘われた少年少女が集うパーティーである被害を受けてしまう。それは人間の尊厳を踏みにじられるものだった。深すぎる精神的キズを負った「ボク」は加奈子がそれに関与していたことを知り、彼女の女友達を拉致し、情報を聞き出したあと顔面にナイフを突きたて勢い切る。劇場のスピーカーから絶叫が爆音で鳴る。

10代に向けて物語の核心である加奈子のある事情を、バイオレンスさと性衝動！死と理不尽さと青春性で描いたこの映画。エヴァンゲリオンだと思った。97年の劇場版わたしたちが『エヴァンゲリオン新劇場版:Q』（2012）に期待したはずだったものすべて詰まっていた。

『渇き。』は現代のエヴァンゲリオン。

もっと言うと「新訳エヴァンゲリオン」だ。

テレビシリーズのエヴァならば、輝かしくない青春やアニメーションという構造をぶち壊すなど。97年の旧劇場版エヴァならば次々に起こる人気キャラクターたちの絶命や人との関係をうまく結ばなせんぶ殺したいという少年の願いなど。

エヴァがエヴァ足らしめているのは度肝を抜くちゃぶ台返しがあるからではない。《ぶちまける》が、エヴァをエヴァたらしめている要因なのだ。だから人の心を打つのだ。

なので、もしも新劇エヴァQがそれまでのエヴァのアティチュードを継ぐならこうだろう。おもむろに着ている服を脱ぐミサト。「見なさい」。シンジは目の前にあるものに叫び声を上げた。背中に目玉が付いていた。黒目が左右にきよろきよろ動くそれは生きていた。目玉の周りには細かくうっすらと毛が生えている。「シンジくん。よく聞いて。あなたがエヴァの力を暴走させた15年前、天変地異が起こったの。津波、地割れ、寒冷化、地球の人口は600万人に減ったわ。崩壊の日から2週間後、世界中の人の身体が突然奇形化したのよ。もう元には戻らないの。でもこのまま生きていくしかないわ。人類にエヴァは危険すぎたのよ。でもわたしたちはまだエヴァの力に頼るしかないの——」

こうなれば新劇エヴァQは神ってた。ミサトの語るのは3.11東日本大震災と原発と放射能の暗喩である。世界崩壊は大震災。奇形化はけっしてもとに戻らない社会と世界を示す。エヴァは原発の比喩となる。

エヴァは時代の空気を喰っていた。それをぶちまけた。テレビシリーズのダウンナーさは同年のオウム真理教事件が影響しているのではないかといわれている。だから90年代の空気感を示しているとされ、伝説化しているのだ。

10年代以降にぶちまけるなら地震と原発だろう。みんながあえて避けつつそれでも回答を求めている問題だからだ。その時代の社会の空気感を喰ってそれをぶちまけるのがエヴァのアティチュードなら、シンジを残して社会が一変し登場人物が奇形化、人を壊したエヴァにまた頼らなければいけないじじつに戸惑うシンジ。アニメというフィクションを通じてどう回答を出すのか。このシナリオなら神ってた。話が脱線した。

新劇エヴァQは中島監督の『渇き。』に差し替えるべきだろう。若い新しい世代にエヴァンゲリオンがあんなストレスの少ない作品だと思われてるのが違和感だ。だから「新劇エヴァQです」とかこつけてタイトルこそそれだが、『渇き。』を上映する。エヴァンゲリオンを継ぐアニメが現れないまま20年近く、アニメーションではなく、実写映画でそれは現れた。アティチュードをここまで継いでいる作品はない。だから文句を言われたり途中退席されたりするなら本望だ。そういうことこそエヴァンゲリオンだからだ。

神聖かまってちゃんも過去エヴァのアティチュードとつながる。青春性をもちながらダウンナー。バイオレンス的で神々しく闇が深い。その言いづらいことをぶちまける。さらに、10代の少女少女に合わせるのではなく10代に《向けて》やっている。

表現の根幹をなすものはやり方がちがえどおそらくみんな同じだ。ロックンロールもそう。いろんなバンドがいるが突き詰めるとおそらく同じところに行き着く。それは『渇き。』の劇中

で語れることでもある。

表現したいことがみな同じならば、「なにをするか」という問に意味はない。なにをするかではなくどんなふうにするか、だ。

そう考えると、表現とはすべて、語り部を変えて語られる《新訳》なのだ。

だから、パクリだとかマネだとかそんなことはスケールの小さい話で、人からなにをいわれても「《新訳》だ！」と答えよう。

うおお

神聖かまってちゃんと映画「渴き。」 ———「渴き。」は現代の新世紀エヴァンゲリオンである。

<http://p.booklog.jp/book/88524>

著者：クソ底辺

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuugata222/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88524>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88524>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ